# 総社市の観光農園や内子町の農産物直売所を見学

農業委員会では1月13日（火）～14日（水）の2日間、県外視察研修を実施しましたのでその概要を報告します。

▲観光農園「吉備路農園」

1日目は、岡山県南部の総社市の農マル園芸グループの観光農園「吉備路農園」を訪問しました。「ここを核に農業のノーマライゼーション（一般化）を目指したい」と、社名を「農マル園芸」とし、農業（1次産業）と製造業（2次産業）商業（3次産業）をかけ合わせた、6次産業としての新しい農業の姿を垣間見ることができました。

また、今年から観光ブルーベリー園の開園をするため、大山町の農家の方にも研修でお世話になったとの話で、親近感を覚えました。

▲いちごの観光農園

2日目は、愛媛県内子町の農産物直売所「内子フレッシュパークからり」を視察しました。同町の農家の2割近い約430人が、新鮮な野菜や果物などを出荷し、年間1千万円を売り上げる農家も3～4戸あります。赤字が多い第3セクターのなかで黒字経営を続け、株主配当も実施しているとのことでした。

地域資源をうまく使えば、地方の中山間地でも活性化できると、元気をもらった研修でした。

▲千品目以上が売られている農産物直売所

■研修に参加した農業委員さんの感想です

## 生産者が創意工夫を

1月中旬、雪の大山町から岡山県総社市にある「農マル園芸グループ」を訪問しました。このグループは、観光農園（いちご、ぶどう、もも）と農産物直売が、2本柱でした。お客様のニーズを考え、近くのホテルと提携し、レンタサイクルまで持ち、ここに来れば1日中遊べるよう工夫してありました。将来は、総合力を発揮して農園付きの小型リゾート施設の展開を目指すと、専務さんは熱弁されていました。

翌日は、愛媛県内子町の「内子フレッシュパークからり」を訪問。ここは、ハム・ソーセージ、パン工場を持つ農産物直売所と本格的レストランを経営。直売所では千品目以上が売られ、竹細工、わら細工までありました。昼食は、本場ドイツから技術導入して製造したハム、ソーセージに舌鼓。営業当初はお客さんが少なく、知名度が上がるまで松山市のスーパーマーケットの店頭で販売したとの、苦労話をされました。

この2施設について考えることは、近くに前者は100万、後者は60万の人口を抱えています。熱意と希望を持って事業をすれば必ず成功するだろうし、たとえ困難が待ち受けていようが克服できる。順調に行けば、近隣の農家の収入が増え（内子で、多い方は年収1千万以上）、若者が帰ってくれば後継者もでき、すべてが好循環するようになる。人間が生きていくために必要な食料を生産する我々が創意工夫を重ねることによって、より良い生活を手に入れようと背中を押された視察研修でした。